教師4人が語り合う「今」と「これから」

高校現場はどうAIと向き合うか?

これからの社会に生徒を送り出す学校・教員として、AIにどう向き合っていくか
――多様な教科や分掌、教員歴の先生4人が、簡単なワークを交えながら語り合いました。
答えのない問いについて真摯に考え、意見交換した様子をレポートします。
皆さんの学校でもAIについて話してみるきっかけとして、ぜひ本記事をご活用ください。

岡本隆司先生
高崎女子高校(群馬・県立)
教員歴13年／数学科／
探究部・教務部

「積極的に社会に出ていく探究の企画運営に力を入れています。生徒は話を聞きたい大人に自分でアポイントを取って活動しています」

古山陽香(こやま)先生
吉原高校(静岡・県立)
教員歴5年／保健体育科／
生徒課

「昨年度、初めての卒業生を送り出し、今は1学年のクラス運営と、新体操部の改革に熱中。日々、校舎から見える富士山に元気をもらっています」

津田純弥先生
南筑高校(福岡・久留米市立)
教員歴13年／理科(生物)／
探究課課長

「探究課で地域密着型インターンシップを始めました。また、教員になってからずっと軽音楽部の顧問。九州の軽音楽を日本のムーブメントにしたい!」

佐々木綱衛(こうえい)先生
三浦学苑高校(神奈川・私立)
教員歴19年／国語科／
進路指導グループリーダー

「本校を含む県内の私立高校8校の生徒が企画・運営・進行を手がけるディスカッションイベント『かながわ・ゆめ・みらい』を全力で応援しています!」

取材・文／藤崎雅子　撮影／坂本宏志

Session 1

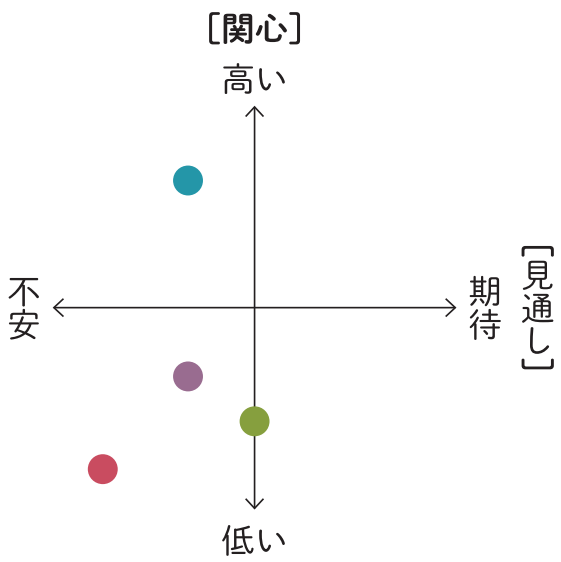
AIに対する意識、各校の現状は?

自校のAIに対する関心（高～低）と見通し（期待～不安）の状況について、4象限の図の中に示していただき、その位置だと考える理由を伺いました。

――各校のAIに対する現状への先生方の認識は、「関心：低」×「見通し：不安」の領域に偏っています。

津田 あくまで印象ですが、生成AIを使ったことのある教員は数人、9割方は「よくわからない」という状況で、関心が高いとは言えないと思います。また、教員は新しいものに対して「良いことがありそう」「こんなこともできるのでは」などより、「何か問題が起きるのではないか?」と考えがち。不安が大きいと思います。

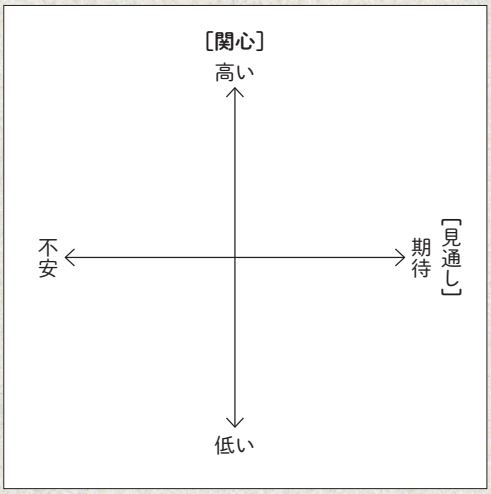
古山 本校はまだAIに向き合う前の段階なのかな、と感じています。コロナ禍を経て1人1台端末の体制になり、その環境を活かしてICTをどう使うか。今はそこに必死に取り組んでいます。一部の先生は個人的に業務に生成AIを活用し始めていますが、周囲に広がるような気配はなく、職員室でAIが話題になることもあまりないですね。



＼ 一緒に考えてみませんか ／

Q

あなたの
「AIに対する関心・見通し」の状況は
いかがですか?



AIに対する「わからなさ」によって関心の低さや不安が生じている場合は、「高校生とひも解くAIの世界」（9ページ～）をご覧ください。

佐々木 本校も同じような状況です。多少興味のある教員はいるものの、全体としてはまだ「よくわからない」という混沌とした状況で、期待や不安をもてるほどの関心もないのではないでしょうか。ただ、実際に活用して便利さを実感すると、状況は変わっていくんだろうという予感はあります。

――岡本先生は最も「関心が高い」と認識されていますね。

岡本 基本的には皆さんの学校と大差ないのですが、今まさに変化の兆しがあるんです。群馬県では県立高校の入試において、Web出願に加え、デジタル採点も始まります。各校にデジタル採点のソフトウエアが導入され、定期考査にも活用していくことになりました。前回の定期考査から一部で活用が始まり、記号問題などの採点には非常に便利だという声が上がっています。今後はすべての教員が活用する方向です。使う必要に迫られ、不安もあるけれど、AI全般への関心は急速に高まっていると思います。

Session 2

AIを使ってみて、感じることは?

ご参加いただいた先生方は、校務のなかでAIを使ったサービスを意識的に利用した経験をおもちです。使ってみた感触を共有いただき、AIの進化が社会に与えるインパクトの大きさについても伺いました。

――実際にAIを使ってみて感じたことをお聞かせください。

古山 席替えアプリを使ったことがあります。生徒の個別の事情を伏せつつ、配慮した席替えが楽にできました。

津田 先日、ChatGPTを使って、流行の性格タイプ診断の結果に基づく席替えをしたら、リーダー気質の生徒が分散されるなどバランスの良い配置になりました。生徒には「文句はChatGPTに言ってね」と伝えています(笑)。教員がやると人間関係を気にし過ぎてかえってうまくいかないこともあるので、こうした無機質な力に頼る手もあるなと思いました。

岡本 三者面談の日程表作成は、かつては回答用紙を1枚ずつめくりながらPC入力していたのですが、数年前にGoogleフォームでの回答になり、最近はそれをChatGPTに入れて自動でスケジュールを作成しています。格段に作業量が減りました。

佐々木 忙しい担任にとって、有能なアシスタントみたいな存在ですね(笑)。その便利さを知れば、使いたくなるのは自然なことかもしれません。

――ほか、生徒のグループ分け、テスト問題の作成、ルーブリックのたたき台作成、小論文執筆の準備などへの活用例も挙げてい

ただきました。社会でもさまざまな場面で、猛烈な勢いで活用が広がっています。現在のAIが社会に与える影響について、「電気の登場に匹敵するくらいのインパクト」と指摘する専門家もいます(※)。

佐々木 生成AIが一般的に使われ始め、わずか1～2年でこの浸透ぶりです。今後、当たり前のように使われていくことは間違いないでしょう。今の高校生が社会に出るころには、もっとすごいことになっていそうですね。

岡本 既に生徒はどんどん使っています。一方で、ICTツールに苦手意識のある生徒も一定数います。どんな生徒も置き去りにしない配慮やフォローの必要性も含めて、AIへの向き合い方を考える必要があるなと思いました。「AIを使っているから偉い」というわけではないですから。

1～2年でこのAIの浸透ぶり。高校生が社会に出るころには、もっとすごいことになりそう。

※『ChatGPTの先に待っている世界』(川村秀憲/dZERO)より

Session 3

AIは、人の営みにどう影響している?

さまざまな職業の人たちはAIをどう仕事に取り入れているのか、編集部から5つの事例を紹介(20ページ参照)。それに対する気づきを交換していただきました。

――ご紹介した5つ(作家・南部鉄器職人・横須賀市役所・食品メーカー・高校野球部監督)のAIへの向き合い方や取り入れ方について、どう感じましたか。

津田 一番驚いたのは、南部鉄器職人が若手育成などにAIを活用しているという事例です。伝統工芸の振興にもAIが使えるという発想はなかったですね。

古山 食品メーカーで、AIアシスタントに決められた言葉を話すことで生産記録を作成しているという事例が印象的でした。幅広い年齢層の従業員が専門知識なしにAIを使い、共に働く仲間のように信頼するまでになっているんですね。

岡本 横須賀市役所ではAIで業務効率化を実現しているという話ですが、それによって職員は人にしかできない仕事に注力しやすくなるのが良いなと思いました。市民にはより温かみのあるサービスが提供されそうです。

佐々木 いずれの事例も、AIを“ツール”として使っていることがわかりますね。AIに指示を出し、最終判断をするのは人であることが、AIと共存するポイントだと思いました。

津田 アイデアを得る選択肢が増えたな、と思

います。ものごとを進めるとき、第一段階はAIと一緒に考え、そこで出てきたものを使って発展させるという、これまでにないプロセスが可能になってきましたね。

岡本 AIによって一歩を踏み出しやすくなっているのかもしれません。これまで取り組むハードルが高かったことも、AIがぱっと出すアイデアや雛型を足掛かりにすることで、挑戦しやすくなりそうです。

Session 4

AI時代、どんな力やマインドが大切？

AIが浸透する社会に対する解像度が高まってきたところで、AI時代を生きていくうえで大切な力やマインドについてご意見を頂きました。

――AIが社会に浸透するなかで、どんな力やマインドの重要性が増していくでしょうか。

佐々木 これからも新しいツールが次々と登場するでしょうから、それを貪欲に試していこうとするマインドがまずは必要だろうと思います。同時に、そうしたツールの活用が苦手な人のことも考えられる、公共的な感性や思いやりも絶対大切です。

人の人生は唯一無二。AIのように一般化されたものではない。その人ならではの経験が一層大事になるのでは。

岡本 キャリア発達の面を考えると、“経験”をおろそかにしたくないなと思いますね。これまで生徒が探究活動で専門家に話を聞きに行くとき、「なぜこの人に話を聞きたいか」を大事にしてインタビューするように伝えてきました。ネットで調べればわかるような知識の部分ではなく、その人だからこその部分に耳を傾け、何かを感じ取ってほしいからです。その人の人生は唯一無二で、AIが作るもののように一般化されていません。人にしかできない経験の積み重ねが、一層大事になると思います。

古山 便利だからといって、何もかもAIに頼って経験しないことには危険性も感じますね。苦労や失敗も、人には大事な経験です。AIに任せてそれらを回避できたとしても、そこに

人の成長はありません。それこそAIに代替される人材になってしまいそうです。AIを使うときと、自分の手を使うときを、選択することが大切だと思います。

津田 そうですね。例えば顧問を務める軽音楽部の活動で考えると、AI作曲ソフトで「ラブソング」や「夏らしい曲」を指定すればそれらしい曲は数十秒で完成します。ただ、それが人の感性や気持ちに響くとは思えません。AIの限界の先に行くことは、さまざまな経験を積んだ人にしかできないものです。しかし、AIに過度に頼って生きていては、自分の経験がAIを抜くことができないでしょう。

――AIに頼り過ぎず、使う場面を適切に選択できるようにするためには、何が必要でしょうか。

＼ 一緒に考えてみませんか ／

Q

AI時代、
どんな力やマインドの重要性が
増すと思いますか?

実際にAIによって起こっている変化についてイメージがわかない方は、「わたしの『AI観』」(20ページ～)をご覧ください。

津田 自分の中に基準が必要になりますね。人に流されるのではなく、自分が何をしたいのかという芯を明確にもつことで、AIをより良く使うことができるのではないでしょうか。

佐々木 AIというツールに指示を出すのは人です。指示されないと動けない人ではなく、自分で考えて主体的に行動できる人になることが、ツールを良く使うカギになるんでしょうね。

古山 ここぞというとき、あえてAIではなく自力でやれるかは、それまでどれだけ「自分の手間をかけてやって良かった」という経験をしてきたかによります。社会に出る前に、しっかり経験を積んでおくことが大切ですね。

岡本 確かに、ゼロからイベントを企画していろんな人を巻き込んで実践するなど、自分で何かを拓くことはすごく大きな経験になるだろうと思います。

佐々木 どれだけモチベーションを高められるか、ですよね。例えば、スラム街の状況を知りたいとなったら、現地に行かないと臭いまでは感じられません。そこまでの体験をしようというモチベーションをもてるか。それをもって経験した生徒が語る将来の話には、魂がこもっています。AIからは決して出てこない話です。

Session 5

これからの学校が変えること・変えないことは?

AI時代を生きる人を育てていくために、今、学校にはどのような対応が求められるのでしょうか。変化が迫られていることと、今後も維持していくこと、その両面について議論していただきました。

――AIによって社会が大きく変化するなか、学校も変化が必要だと思いますか?

岡本 AIの登場によらず、近年、教育の流れは大きく変化しています。例えば、画一的な教育ではなく生徒一人ひとりに対応していくことや、多様な学びの選択肢があるなかで学校という場でしかできないことを考え力を入れていくなど…。そうした変化を加速させていく必要は感じています。

佐々木 学校のすべてを変える必要はないでしょうが、やはり変化は求められると思います。一般的に学校は新しいものを取り入れることが苦手だったところがあります。そこは変えていったほうがいいかもしれません。AIのようなものも、まず教員が試してみようという姿勢は大切かなと思います。

津田 これまで教師が行っていた生徒からの質問や相談の何割かは、AIが担うようになりそうです。だからといって僕ら教師が不要になるわけではないと思います。人としての感情や感覚は、やはり教師が伝えていかなくてはいけないことではないでしょうか。

岡本 学校ごとに掲げている教育目標や目指す生徒像などは、普遍的なものですよね。AI時代になっても、我々がどんな人を育てるかは、信念をもってやり続ければいいと思いま

す。ただ、その実現の手段の一つとしてAIを使うと、面白いことができるかもしれないですね。

古山 これだけ変化の大きい時代にあって、何を変え、何を変わらず大切にし続けるか、校内にもいろんな考え方があります。まず、子どもたちの未来を考える教員同士が、互いの考えを伝え合うことが大切なように思います。

――ご自身の学校のこれからを、どう思い描いていますか。

岡本 本校の探究活動は、生徒の意見ややりたいことを否定しない方針で実施しています。これからは失敗してもやり直しがしやすい社会になっていくと思うので、過度に失敗を恐れるのではなく、進路指導やキャリア教育に

おいても、生徒のやりたいことを否定しないスタンスがよいのではないかと考えています。

古山 全教員で意見を出し、主体性の育成を学校全体として目標に掲げたところです。これからの社会でも非常に重要なものとして取り組んでいきたいと思います。

津田 AIが進化しても、学校はいろんな経験やチャンスを提供する場として絶対必要です。社会に出て大怪我をしないよう、生徒にはちょっと“擦り傷”を作ることも経験させられる場でありたいと思います。それには、僕ら教員もチャレンジして怪我してみる。その経験を通して初めて生徒に伝えられることがあるのではないでしょうか。

佐々木 「どういう生徒を育てたいか」を学校全体できちんと共有したうえで、それに向けてどんなツールをどう使うか、取捨選択していきたいですね。皆さんのお話にも出ているように、学校は教室で知識を一方的に伝達する場ではありません。いかに社会とつなげるかが、これからもっと大事になると思います。現実の社会との接点のなかで、生徒の「将来こうなりたい」「そのために今はこれをがんばろう」というモチベーションを醸成していきたいと思います。

＼ 一緒に考えてみませんか ／

Q

AI時代、
あなたの学校ではどんなことを
大切にしたいでしょうか?

今まで大切にしてきたことを再確認したり、これから大切にしたいことを改めて考え直したり、自由にお考えいただけたらと思います。

Session 6

AI時代、どんな教師でありたい?

最後に、本日の議論を通じて感じたこと・考えたことを踏まえた、先生方ご自身の今後の展望を伺いました。

――AI時代において、ご自身はどんな教師を目指していきたいとお考えですか。

古山 今日、先生方が口々に「魂はAIでは作れない」とおっしゃっていたことが、とても胸に響きました。AIによって社会が変化するとしても、やはり基本的な人間性を育てる大切さは変わらないですよね。しっかり魂を育てられる教師でありたい! その気持ちが一層強くなりました。

岡本 AIについてもそうですが、学び、挑戦する教師であり続けたいですね。探究活動などで生徒を多くの社会人につないでいますが、一番身近にいる大人は教師です。その教師が挑戦しようとする姿を見せれば、きっと生徒は何かを感じ取ってくれると信じています。

津田 今日、先生方と議論させていただいて、自分はAIに指示されて動く人間になりかけていないか?と考えてしまいました。もし僕がそんな状態だったら、生徒もそんな人間に育ってしまう可能性があります。改めて、教師としての自分をしっかりもとうと思いました。そのためには、この座談会にちょっとだけ無理をして参加したように、自分を甘やかさず経験値を上げていこうと思います。最終的には、生徒に「これを聞くならAIより津田だよね」と選んでもらえる教師になりたいですね。

佐々木 社会に出たらAIを使うようになることは間違いないので、生徒が目的に合わせてうまく使えるような支援をしていきたいと思います。同時に、他者を思いやる力や主体性、チャレンジする力、チームで動く力などの人間性の育成にも一層力を入れ、AIのようなツールも駆使しながら取り組んでいきたいと思います。また、自分自身も、一緒に働く同僚が幸せになれるような人間性を備えた教師になりたいですね。

＼ お疲れ様でした！ ／

座談会を振り返って

教員のわくわくを醸成したい

私自身はAIのような新しいツールに興味がありますが、苦手意識のある先生方もいらっしゃいます。そうした事情も汲みながら「よくわからないから不安」を払拭し、教員がわくわくしながら新しいことに取り組んでいる学校を目指していきたいですね。（岡本）

他校と意見交換する意義を実感

本校では先生同士のコミュニケーションが活発で、校内研修も行っていますが、他校の先生方と情報交換すると新たな視点が得られることを実感しました。自分のためにもなるし、最後は生徒に還元されるはず。この気づきをしっかり職場に持ち帰りたいと思います。（古山）

今日の議論を、自校でも!

今日、AIについて先生方と率直に議論させていただき、とても有意義でした。これと同じことを自分の学校でやりたい！　まずはAIについて考えていることを率直に共有することから始めれば、そこから次の方向性や具体策が見えてくるのではないでしょうか。（津田）

目的意識をもったAI活用を

まずは「自分たちの学校ではどんな生徒を育てたいか」という目標を共有することが大切だと、改めて思いました。目標の達成にはどんな課題があるか、その解決にAIを使えるか、という順番で、目的意識をもってAI活用を議論していこうと思います。（佐々木）

このあと5分、同僚の先生と話してみませんか

座談会では先生方が率直に話し合うことで、気づいたこと、見えてきたことがあるようです。
皆さんの学校でも、AIをテーマにした会話のきっかけになれば嬉しいです。